

〈書評と紹介〉 大澤真平著『子どもの「貧困の経験」：構造の中でのエージェンシーとライフチャンスの不平等』

SHIDA, Mirai / 志田, 未来

(出版者 / Publisher)

法政大学大原社会問題研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

大原社会問題研究所雑誌 / Journal of Ohara Institute for Social Research

(巻 / Volume)

785

(開始ページ / Start Page)

47

(終了ページ / End Page)

51

(発行年 / Year)

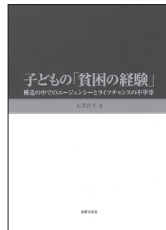
2024-03-01

書 評 と 紹 介

大澤真平著

『子どもの「貧困の経験」』

——構造の中でのエージェンシーとライフ
チャンスの不平等』



評者：志田 未来

本書の構成と内容

本書は子どもの「貧困の経験」とその帰結を示すことをゴールに据えた研究書である。本書では貧困にある子どもが自身の置かれた状況をどう認識し生活を作り上げようとするのかという主体的な側面と、それを制限する構造の2つの側面に焦点を当てつつ貧困の経験が描かれる。その際、著者が依拠するのは、社会構造のなかに位置付けられた個人が物質的な資源や力の欠如による制約を受けつつも、そのなかで主体的に生活をコントロールする姿に着目するリスターの「構造の中でのエージェンシー」という概念である。そこには「構造と主体の両面を理解できなければ、貧困のなかにある子どものライフチャンスの不平等を明らかにできない」(p.v)という著者の強い問題意識がある。以下、各章をまとめていく。

序章では理論的枠組みを提示するために「子どもの声を聴く研究」が整理される。子どもの声を聴く研究は、子どもを人生の主体として捉え、子どもの側から貧困の理解を可能にしてき

た一方で、子ども期の「いま」に主眼があるため大人になってからの状態については十分に検討されなかったと批判される。したがって「いま」の積み重ねの不利がどのようにライフチャンスの不利につながるのかを捉えられる枠組みが必要だと主張する。つまり、子どもが貧困の経験のなかで、生活の評価や自己の評価をどのように形成し、現状を受け入れていくのか、そしてそのことが選択肢や制約にどのようにつながっていくのか、といったことを明らかにしなければならないと述べられる。それには子どもの側から貧困のなかに生活することの意味と影響を描くことを可能にする「子どもの貧困の経験」という視点が有用であると示される。

1章では本書を通じた研究視点と研究課題について整理される。著者が研究視点として採用するのは「資源の不足・欠如としての貧困」である。資源としては物質的・経済的資源、身体的および精神的な健康といった個人的資源や時間・情報・アイデンティティの3つの編成資源、人間関係としての社会関係的資源、公共の社会的資源などに着目することが述べられる。そうした資源がどのように評価され、選択されることで、主体的に生活を実現していくのかを検討することが目指される。本書の研究課題としては、子どもの視点から見た貧困の生活と認識を明らかにする、そして子ども期と若者期の「いま」の積み重ねとライフチャンスの実現の実際を示すという2つが設定される。

2章では、1つ目の研究課題である子どもの視点から見た貧困の生活と認識を明らかにすることが目指される。ここでは量的データを用いて子どもの社会生活の分化と家族の資源が子どもの生活に与える影響について検討される。ま

ず、子どもたちの社会生活の分化について放課後に焦点を当てると、放課後の過ごし方には階層差が存在すること、低所得者層は使える社会的資源をやりくりしながら、子どもの放課後の時間を充実させようとしていることが明らかになる。そこでは親族などの社会関係の資源を用いつつ、学童保育などの既存の公共サービスや社会的資源が重要な役割を果たしていることが示された。後半では、家族の資源と子どもの生活関係について剝奪指標を用いて分析され、子どもの生活水準と社会関係や健康状態との関連性が示される。低所得者層においては、資源があったとしても剝奪状態にある割合の子どもが多く、資源が欠如することでより深刻な状態になることが示されている。

2章で構造的な制約が明らかになるが、続く3章、4章はそうした制約のなかで子ども・若者がどのように生活を組み立てようとしているのかに迫るパートである。インタビューデータに基づき、3章で子ども期の貧困状況が、そして4章では若者期の状況が、それぞれ検討される。子ども期の貧困について見出されたのは、資源を駆使して生活を組み立てようとするよりも、資源の不足に直面し、スティグマを恐れ、制限された生活を送らざるを得ない状況である。こうした現状に対して公共施設や学校など公共の社会的資源が一定の役割を果たしていたものの、限定的であることが明らかにされる。親族などの社会関係から資源を調達しようとする姿も見られるが、その限界も示され、子どもの自発性に任せるのではなく社会的な資源を制度化することで有効に機能させることの必要性が示された。また、子ども期から、生活上の問題は家族で解決するべきだという規範意識を持っており、それによって家族外の資源へのアクセスを難しくしていることも明らかになる。こうしたことが子どものエージェンシーを制限

する要素であることが示された。

続く4章では、3章で検討した子ども期の生活がどのように若者期の生活へとつながるのかが検討される。そして第一の研究課題に加え、第二の課題である子ども期と若者期の「いま」の積み重ねとライフチャンスの実現の実際を示すという課題にも切り込まれていく。高校卒業時の進路展望について検討すると、高校卒業の時点で既に多くの若者が人生展望を描けなくなっていることが示される。これまでの経験の積み重ねのなかで自分には他者と同じようなチャンスは無いと認識し、状況適応的な選択がなされていく様子が描かれた。また、私的な社会関係から得られる資源も、制度化された公的な社会的な資源も、若者の生活の安定には十分に機能してはいないことが示される。生活を切り開いていくための状況や資源に対する評価は低く、主体的に選択できる生活の幅が狭められ、個人の主体性が発揮されにくくなっていた。

5章では、貧困の世代的再生産の実際について女性4名に対するインタビュー調査から見てきたことが整理されている。ここでは特にジェンダーとライフコースの観点から貧困の世代的再生産について検討がなされる。貧困状況にある女性たちの主体性に着目しつつ、資源の欠如や構造的な制約によって彼女らの主体的行為能力がどのように抑制されてしまうのかが描かれる。4人のライフコースを分析することを通じて見えてきたのは、女性たちが担わされるケア役割によって彼女たちの人生は大きく制限を受けているということである。こうしたことから、貧困の世代的再生産の解消を考える際に、従来の学力向上や職業スキル獲得といった貧困政策だけではなく、性別役割規範やケアの必要な家族への対応も検討することの必要性が提示されている。

終章では議論のまとめとして、本書で明らかになった知見が整理され、それを基に支援と政策の方向性が示される。ここまでの分析により子ども期と若者期の「いま」の積み重ねによってライフチャンスが制限されている様子が明らかになった。このことから、エージェンシーについて短期的だけではなく長期的に捉えたうえで、そのエージェンシーをいかに発揮できるようにするかを問わなければならないと主張される。また、子ども自身が主体性を行使する存在であるという知見より、子どもが自由に選択できる環境を整備することが必要であると主張される。というのも「人には最初から選択の能力が備わっているのではなく、それを行使する経験自体がその能力を涵養していく」(p.128)のであり、それを通じて将来展望を描けるようになるからである。しかし、貧困に暮らす子どもはそうした試行錯誤と失敗の機会が剥奪されることで、どのような生活を築いていきたいのかという展望までも持てずにいた。したがってそうした状況を打開するためには経済的資源を中心に、健康、時間、情報、社会関係、公共の社会的資源など、他の資源の補償を含めた政策を通じて、子どもたちがエージェンシーを発揮できるようにすべきだと論じられる。

本書の特徴と意義

本書全体を通じて描かれるのは、子ども期から若者期にかけて資源がなく主体性を大きく制限されてきた過酷な状況である。著者が構造と主体性の両側面を描こうとしながらも、主体性を厳しく制限されたものとして描いてきたのは、そうした過酷な制約を指摘することで、当事者の主体性を後押しする支援策の必要性を提示しようとしたのではないだろうか。

全体を通じて学校に関する記述が薄いようにも感じたが、それは著者自身が主張するよう

に、ライフチャンスをめぐる議論を教育制度だけに矮小化させないという思いを反映させたものであると理解した。したがってこれは教育以外の側面に多く光を当てるために凝らされた工夫であろう。「ライフチャンスは教育実践や学習支援だけで実現するような単純なものではない」(p.151)という著者の指摘は、同じような研究に関心を持ちながらも、学校を主として研究を進めてきた評者にとっては非常に耳の痛い指摘であった。著者が主張するように、ライフチャンスの不平等を解消しようとするならば、そのアクターは教育機関だけではないし、その方法も多様なはずである。これまで子どもの育ちにおいて主要な役割を担ってきた家庭と学校が疲弊しているなか、誰が子どもの育ちを保障するのか、また国として政策を通じて何ができるのか。そうした貧困状況にある子ども・若者を支えることができるアクターや政策のヒントが本書にはちりばめられてる。

本書の研究上の貢献は多岐にわたるものではあるが、ここでは2点に絞って述べていきたい。1つは、貧困状況にある子ども・若者のケアの問題に踏み込んでいる点にある。ケア論は主に育児や介護といった領域で議論が重ねられてきており、学齢期の子どもについてはマートンやノディングズらによる学校におけるケアの議論以外十分に検討されてこなかった。しかし、家族に負わされたケア役割の負担やケアの社会化をどう行っていくかということに関しては、幼少期や老齢期だけの問題ではないはずである。その意味で著者が提示した放課後の子どもたちのケアという視点は、ケアについての議論を深めるものとなり得る。子どもたちが必要とするケアはどういったものなのか、それを社会として保障していくためには何が必要なのか。本書で提示され知見を基にさらなる検証が求められる。さらに、若者、特に女性が担うケ

アの問題も著者が提示した重要な論点である。本書では貧困にある女性たちがケア役割を担わなければならないことによって職業選択の幅が狭められ、その選択によって生活が不安定なものになっていることが示された。女性の貧困においてケア役割の重責は議論から外すことはできない。貧困の再生産、特に女性のそれにおいては、ケアの社会化をいかに進めていくということが非常に重要である。多くの研究によって示されている点ではあるが、本書はその重要性を再度示したと言える。

第二に、子どもの貧困の議論における経済的な分配とは違う側面に光が当てられたことに本書の重要な意義がある。本書を通じて、貧困にある子ども・若者が日常の相互作用を通じて貧困に由来するスティグマを認識しており、それが彼らのエージェンシーを押しとどめていることが見出された。このことから子どもの貧困について、これまで主要であった経済的な分配の議論や、「安心していられる場所の提供」といった他者からの承認の議論だけでなく、同じ社会構成員として対等に社会生活に参加できるという次元の承認が重要であると主張されている。

この承認の問題は支援策を検討する際により重要な指針を提起していると評者は考えている。つまり、支援策を講じる際にその支援策が、同じ社会構成員として対等に社会生活に参加できる、という次元の承認を満たしているのかどうかによって有効に機能し得るかどうかが左右され得るのではないだろうか。例えば、親が世間の目を気にして就学援助を受けることができなかったという本書に登場した語りを思い返してみたい。これは、貧困状況を緩和するための就学援助が「制度上は提供されている」にもかかわらず、そうした支援に付随するスティグマによって支援を利用できていない状況があ

ることを示している。すなわちそれは制度を利用してしまえばその制度に付随したスティグマによって、同じ社会構成員として対等ではなくなってしまうという恐れによるものだと考えられる。それは彼らが漠然と感じている恐れではなく、支援を受けようとした際に「人が話しくなかったですね。なんか怖いですよ」(p.99)「目も合わせてくれない」(p.114)といったやり取りのなかで蓄積されたものだろう。そう考えれば、支援策を講じたとしても、その支援策を利用することで利用者の社会的地位を貶めるならば、その支援策は十分に機能し得ないことになってしまう。そうした支援策の使いにくさについては、貧困にある子ども・若者の目線で語られなければ見えにくい問題だったはずであり、子ども・若者の視点から貧困問題の理解を深める、という本書の趣旨が大きな貢献をもたらしている点でもあろう。

以上のように本書は多くの政策的・理論的知見があると言えるが、そのうえで気になった点を挙げるとするならば、資源を活かそうとする個人の戦略的行為についてももう少し踏み込んだ分析も可能だったのではないかということがある。例えば、5章で登場する父子家庭で育ったKさんは、「戦友」と形容する妹と共に新しい生活に踏み出しており、一人では十分な収入を得ることは難しいながらも妹という社会関係による資源を活かすことでその生活を成り立たせていた。生育家庭での生活の厳しさを示すとともに、その過酷な状況を共に切り抜けてきたことが窺える「戦友」という言葉。長く厳しい生育家庭での生活のなかでも妹と良好な関係を築いてきたKさんのエージェンシーと捉えることができるのではないか。こうした資源をめぐる個人の工夫を丁寧に取り上げることは、本書が目指していた子どもたちのエージェンシーを理解するという部分にも大きくかかわるようにも

感じた。本書で扱われていたデータからはそうした主体性によって人生を切り拓いていこうとする様子を垣間見ることもできるように思ったために、終章にて「本研究で貧困の状態におかれた多くの子どもたちにライフチャンスはなかった」(p.125)と結論付けることに少しの戸惑いを感じた。

もちろん評者はデータを全て見ているわけではないため、こうした解釈は想像の域を出ない。これは評者の個人的な関心による部分も大きく、本書の学術的価値を減ずるものでは決し

てない。本書は子どもの貧困に関心がある人にとっては間違いなく必読文献になるだろうが、それ以外の幅広い層の人に手に取ってもらい、日本の社会問題の一端を、リアリティ溢れる本書から体感していただきたい。

(大澤真平著『子どもの「貧困の経験」——構造の中でのエージェンシーとライフチャンスの不平等』法律文化社, 2023年5月, xi + 159頁, 定価 3,600円+税)

(しだ・みらい 日本女子大学学術研究員)